

エジプト

「二つの「婚活」物語にみる現代の結婚難」

後藤 絵美

●婚活物語の流行

二〇〇〇年代、日本では晩婚化や未婚率の上昇が社会問題となり、「自分から動かないと結婚が難しい時代」という認識から、「婚活」という言葉が生み出された。結婚を目標に自分を磨き、より多くの出会いの場を求める二〇代から三〇代の女性が増加し、その婚活体験記や恋愛事情を扱った物語が、ブログやマンガ本、テレビ・ドラマなどの形で出回った。同じ頃、エジプトでも、女性たちの結婚難の問題が世間の注目を集めていた。きっかけをつくったのは、ガーダ・アブデル・アール（一九七八〜）という女性が始めたブログである。「結婚したい」と題するブログは、二〇〇六年、当時二七歳の薬剤師ガーダが、結婚をめぐって日々感じていた社会的なプレッシャーや、婚活の失敗体験、

花婿候補となった男性との出会いなどをおもしろおかしく綴ったものであった（参考文献①）。ブログは二年で五〇万ヒットを超えるアクセスを得て、二〇〇八年に同タイトルで書籍化され（参考文献②）、二〇一〇年には、テレビ・ドラマ化された（参考文献③）。

●適齢期は二〇代はじめ

「二三歳になったときから、自分はオールドミスだという気がしていた」とガーダは書いているが、二〇〇五年人口保健調査によると、エジプト都市部の女性の初婚平均年齢は二二歳（農村部では一九歳）、高卒以上の平均は二三歳である。三〇歳以上の女性の未婚率は六％以下、つまり、ほとんどの女性が二〇代のうちに結婚しているということになる。この数字をみると、エジプトには「女性は

若いうちに結婚してあたりまえ」という状況があるように思われるが、『結婚したい』に描かれるのは、この「あたりまえ」を実現しようと大変な苦勞を重ねる女性たちの姿である。ガーダはいう。確かに、かつて結婚は難しいものではなかったらしい。娘たちが知り合いや親戚の結婚式に行くと、若者に囲まれ、その場で求婚された。あるいは、父親の家でお行儀よく暮らしていれば、それだけでふさわしい相手が連れてこられた。結婚とはそういうものであった。ところが今は違う。式場で結婚相手を獲得しようと目を光らせているのは娘たちとその母親である。待つていても何も起こらないと娘たちは自ら外に出て、出会いを求める。「相手を捕まえることすべての責任が娘の肩にのしかかっている」のだから。今やエジプト

の女性たちも婚活が必要な時代になかにいるというのである。

●出会いはリビングルームで

「すべての責任が娘の肩に」とガーダは嘆くが、その婚活体験記を読むと、彼女には両親からのかなりのサポートがあったことがわかる。花婿候補の紹介者の多くは、父母の友人や同僚、親戚筋である。また、エジプトでは「お見合い」や結婚に関する話し合いが女性側の家で行われることが一般的である。そのためガーダの家にも、花婿候補が次々とやってくるのだが、彼らを迎える準備は大きく異なるものとなる。訪問の日時が決まると、ガーダと母親はお見合いの舞台となるリビングルームの大掃除にとりかかる。壁や床を水で洗い、カーペットをベランダに運び、埃や砂をはたく。カーテンを洗濯し、窓ガラスを拭き、食器を磨く。その間、父親は花婿候補に出す飲み物やお菓子の買出しに出る。

家族や友人に付き添われて、訪れる花婿候補の多くは、ガーダや両親と初対面である。しばらくのあいだ、皆で歓談し、互いの振る舞いや容姿を注意深く観察しながら

ら、結婚の条件や結婚後の生活について話し合う。そうして結婚実現の可能性を探り合うというのが、ガーダのお見合いの通常の流れている。

●エジプト的な婚活エピソード

「結婚したい」に登場する花婿候補の大半は、「変人」か、どこか問題のある人物である。サッカー狂でお見合いの最中にテレビをつけて試合観戦をはじめ男性や、初対面のガーダの服装やメイクを批評する男性、部下にガーダや家族の素行の「聞き込み」を命じる刑事などである。そうしたトンドモ候補者たちに続いてガーダの家を訪れたのが、「茶色いサンダル」の男性であった。

彼を紹介したのは、近所に住むガーダの幼なじみとその夫。二人は、彼がムスリム（イスラム教徒）のなかでも「とくに敬虔」な人物だと評した。エジプトは人口の約九割がムスリム（残りの約一割はコプト・キリスト教徒）といわれているが、日本人の目からみると、たいていの人は、「敬虔」である。約束を交わすときは必ず「神が望むならば」と言い添えるし、ラマダンと呼ばれるイスラムの断食月

には、猛暑のなかであろうと、大半の人々が日中の飲食を断つ。

そんなエジプト人のなかでも「とくに敬虔」と評されるのが、サラフ主義者と呼ばれる人々である。「サラフ」とはイスラム教の初期世代を指す言葉だが、サラフ主義者は、イスラム教の預言者ムハンマドの言行やサラフの慣行の模倣をとくに重視する。預言者や当時の人々に倣ってくるぶし丈のワンピース状の衣服を着たり、あご髭を伸ばしたり、サンダルを愛用したりする。女性は全身をゆつたりとした長衣やヴェールで覆う。こうした服装や、「保守的」な男女関係、洋風の文化に対する批判的な姿勢などで知られるサラフ主義者は、一九七〇年代の終わり頃から大学キャンパスを中心に目立つようになった。一時は「イスラム過激派」として政府の弾圧を受けたが、九〇年代以降、エジプト社会のさまざまな場面で影響力を揮っている。

ガーダの家にやってきたのは、スーツを着こなしながらもサンダルを履き、顔中に髭を生やした男性であった。付き添いは二人の妹。慎み深さが美德と、他人であるガーダとは目を合わさず、直接

話することも拒む。こんな相手では結婚後にガーダが窮屈な思いをするのではと母親は心配し、彼にいろいろな質問をする。結婚後、ガーダは仕事を続けられるのか、実家を訪問することや遊びに出かけること、テレビやインターネットを視聴することについて、どう考えているのか。花婿の答えは鷹揚で理解がある。「薬剤師の仕事は天職です。続けることに問題はありません。」「実家とのつながりは大切ですよ。」「私自身遊びに出かけます。もちろん、場所は選びますが。」「娘さんは賢い方だと聞いています。テレビやインターネットについては、彼女の知性を信頼します。」

一方のガーダは、男性の外見に不安を抱きながらも、「サンダルや髭に結婚を邪魔されてなるものか」と寛容な姿勢を崩さない。しかも彼はやり手のビジネスマンで、家や車、家具や日用品などで、結婚に必要なものはすべて所有しているという。いよいよ、ガーダの前にも理想の花婿があらわれたのか。皆がそう思った瞬間、同伴の二人の女性が、実は、彼ら妻たちだったことが明らかに。イスラム教の啓典クルアーン

（コーラン）には、「もし汝らが孤児に公正にしてやれそうもないと思ったら、誰か気に入った女をめとるがよい、二人なり、三人なり、四人なり」《「四章三節」という言葉があるが、エジプトの法律では、イスラム法のひとつの解釈のもとで、ムスリム男性が最大四人の女性と結婚することが認められている。

預言者も複数の妻を同時に娶っていたことから、サラフ主義者の間では一夫多妻がめずらしくない。とはいえ、ガーダもその両親も「三番目の妻」の地位は決して望まない。「この話はナシだ！」という父親の怒鳴り声でエピソードは幕を閉じる。

●もうひとつの婚活物語

ガーダの婚活は、両親との「三人四脚」で進められたようだが、結婚に関して家族のサポートが得られない人々も少なくない。そうした女性たちの婚活物語として、ここでは、ムハンマド・アミン監督の映画『エジプトの二人の娘』を紹介したい（参考文献④）。この作品がエジプト国内で公開されたのは二〇一〇年七月。二〇一一年の「革命」が始まる半年ほ

ど前である。映画の舞台は二〇〇八年のカイロ。主人公はハナーンとダリアという二人の未婚女性である。

ハナーンは三〇歳、カイロ大学医学部の図書室に勤務している。ハナーンの従姉ダリアは三二歳。同じ大学の医学部に勤務する医師である。中流階層出身の二人は、ともに父親のいない家庭で、母親と兄や弟と一緒に暮らしている。

映画のストーリーは結婚を強く望むハナーンとダリアが経験する、いくつかの出会いと別れを中心に展開していくが、同時に、二人やその周囲にいる数多くの「結婚したいのにできない」女性たちが抱く、戸惑いや苦悩が描かれている（詳細な内容については参考文献⑤を参照されたい）。



ホテルでの豪華な結婚式(2005年、カイロ 筆者撮影)

●結婚難の背景

なぜ、今、エジプトの女性たちは「結婚したいのにできない」のか。この問いには、さまざまな答えがあるのだろうが、ここでは、『エジプトの二人の娘』に描かれているいくつかの背景を挙げていきたい。

結婚難の原因のひとつは、適齢期の若者が直面する社会経済的な困難にある。結婚にはある程度の自己資金と将来への展望が必要である。結婚前に、カップルは新居を整えなければならないし、「婚約式」「結婚契約式」「床入れ式」といった名で数度にわたって行われる挙式の費用も必要である。花婿とその家族は、こうした費用の大半を負担することが期待されるうえ、慣習上の花嫁への贈り

物（金製の指輪や腕輪など）を用意したり、ムスリムであれば花嫁に婚資を支払ったりする。結婚成立までにかかる費用の総額が、花婿の年収の数倍におよぶ場合も少なくないという。

さらに、花婿は結婚後の生活を支えていかなければならない。エジプトでは「夫が妻を扶養し、妻は夫に従順である」という夫婦関係のあり方が、社会通念の面でも、法律の文言の面でも定着している（参考文献⑥）。

ところが、映画に登場する二〇代から三〇代前半の男性は皆、大学を卒業したものの就職口がなく、家でぼんやりと過ごしていたり、国内の労働市場に見切りをつけて外国で働くことに希望をつないだりしている。彼らにとって結婚は目下の選択肢に入っていない。

ハナーンやダリアの前にあらわれる花婿候補はすべて、それなり収入と将来性のある三〇代後半から四〇代前半の男性である。問題は、彼らにとって、二人のような、高学歴で専門職につく三〇代の女性が、理想的な花嫁ではないらしい、ということである。

映画のなかでハナーンは結婚相談所に登録するが、その際プロフィールに「婚資は不要、結婚費用の半分はこちらで出します」と記させている。また、職場に気になる男性があらわれると、彼の前でこれみよがしに、「妻はとにかく夫に従うべき。それが正しい夫

婦関係のあり方」「男女平等」だとか「女性の自己実現」なんて言葉は社会を混乱に陥れるためのもの」と言ってみせる。自分は夫に對して経済的な支援ができる、夫に従順な、理想的な花嫁だとアピールしているかのようである。

ところが、結婚相談所からは音沙汰がなく、職場の男性にはずっと年下の女性との仲立ちを頼まれてしまう。やがて上司の紹介で三九歳の大学教員と出会うが、結婚を目前に「僕には女性への強い不信感がある。やはりあなたとも結婚できない」と言われてしまう。

●体制の腐敗と結婚難

社会経済的な困難、不利な社会通念、不運としか言いようのない出会い。これらに加えて、結婚難の原因として映画のなかで描かれているのが、二〇〇〇年代後半当時の「体制の腐敗」である。

ダリアは同じ「ガマール」という名をもつ三人の男性と知り合う。一人目は、ダリアが「出会い」を求めて参加した反政府運動グループの一員である。二人は活動を共にするなかで親しくなってきたが、いよいよ愛を確かめ合おうと思ったところで、彼が政府側の内

通者だったことが判明する。

二番目のガマールは、三八歳の自称通訳である。インターネットのチャットで知り合った二人は、顔もみないままに親しくなっていく。ただ、過去に治安警察から理由もなく暴行を受けたため、社会に絶望し、「家族も未来も持たない」と心に誓っていた彼との関係は、なかなか進展しない。ついに二人が顔を合わせた日、ガマールは反政府的な見解をネット上で広めたとして連行されていく。

三人目は、ダリアが結婚相談所を通じて知り合った四〇歳の農業技師である。沙漠の農地化を目指し、政府の事業資金を借り入れ、農作物の改良に取り組んでいた彼の実直さと素朴さに惹かれたダリアは、彼からの求婚を受け入れる。ところがその直後、政府へのローンの返済が滞ったとして、三年の禁固刑が決まる。刑の執行を免れるため、ガマールはダリアに別れを告げ、国外へ逃亡する。医師として人に尽くし、自分にも人並みの幸せを願ったダリアの想いは、儚く挫かれてしまう。

●婚活物語の行方

結婚難がもたらす「悲劇」を笑

い飛ばそうとする『結婚したい』と、すべては政治が悪い、政府が悪いと声高に訴える『エジプトの二人の娘』。異なるトーンをもつ二つの婚活物語は、近年の「革命」のなかでエジプトの人々がみせた二つの顔とも重なってみえる。一方、気になるのは、本稿の始めでも言及した人口保健調査の結果である。表1は、エジプトの二五歳から三四歳までの女性の未婚率について、過去二〇年の数字を示したものである(管見の及ぶかぎり二〇〇八年の調査結果が最新である)。表2には、参考として同時期の日本の未婚率を示した。二つの表を比べてわかるのは、エ

表1 エジプトにおける女性の未婚率 (%)

	25-29 歳	30-34 歳
1988	15.6	5.1
1995	13.4	5.1
2000	16.2	6.1
2005	18.7	6.0
2008	17.7	6.9

(出所) エジプト人口保健調査報告 (Egypt Demographic and Health Survey) をもとに筆者作成。

ジプトの女性の未婚率が、二〇〇〇年代後半までそれほど変化していなかったということである。『結婚したい』のガータは、自分エジプトの二五歳から三五歳の独身女性「一五〇〇万人の一人」だと述べている。映画『エジプトの二人の娘』のなかには、この国の女性は医師も、技師も、教師も、弁護士も、皆、結婚できずにいるという台詞がある。次の調査結果では、女性の未婚率の数値が上がるのだろうか。それとも、これらの数字は、現実を必ずしも反映していないのだろうか。「結婚難」とは誰の問題なのだろうか。近年のエジプトの状況全体を「結

表2 日本における女性の未婚率 (%)

	25-29 歳	30-34 歳
1990	40.4	13.9
1995	48.2	19.7
2000	54.0	26.6
2005	59.1	32.0
2010	60.3	34.5

(出所) 国勢調査結果をもとに筆者作成。

婚難」と呼ぶのは誇張であり、それにまつわる大騒動は、社会不安のあらわれに過ぎないという分析もある。今後、エジプトではどのような婚活物語が紡がれていくのだろうか。新たな調査結果の数字と合わせて注目したいところである。(ことう えみ/東京大学東洋文化研究所助教)

《参考文献》

- ① <http://wanna-b-a-bride.blogspot.jp/>
- ② Ghada Abd al-Al, 2008, *Ayiza Atagawwiz*, Cairo: Dar al-Shuruq.
- ③ Rami Imam (監督) 2010, *Ayiza Atagawwiz*.
- ④ Muhammad Amin, 2010, *Bintain min Misr*, Al-Subki Film.
- ⑤ 後藤絵美「二〇一二年」『アラブ映画に見る女性と社会』『Asahi 中東マガジン』一月六日。
- ⑥ 「二〇一二年」『結婚したい』「離婚したい」女性たち」鈴木恵美編『現代エジプトを知るための60章』明石書店、二二一六—二二二一ページ。